

は、今回長期人工呼吸器を装着し、離脱に成功した慢性閉塞性呼吸障害の患者を経験したので、その経過と人工呼吸器装着中の看護の要点をまとめたものをここに発表する。

3 ME看護における安全性維持とその対策について 第一報

人工臓器部透析室 発表者：菅野 芳雄
重山、山口、田村、

医療における最近の工学技術の進歩には、めざましいものがあり、実際に、数多くの医療電子機器（以下ME機器と略す）が診断・治療の場に導入され多くの成果を上げており、これらME機器の医療に果たしている役割は、極めて大と言えるであろう。

ME機器は、まず患者ならびに医療スタッフにとって安全であり、かつ信頼の高いものでなくてはならない。

このため、ME機器の製造者側（メーカー）は安全で信頼性の高い機器を作成する責任があり、日本ME学会で定められた医用電気機器暫定基準を遵守するように指導されている。一方、使用者側（ユーザー即ち医療スタッフ）は、ME機器をよく理解して使用し管理していく責任がある。特にME機器は正しく理解されずに使用される場合は、無用の長物にもなりかねず使用者はその機器を十分に理解して使用しなければならない。

人工臓器部透析室では、他の職場よりME機器に多く接するので通常よりME機器をより安全に有効に使用する為に様々な対策をして来た。

対策の一つとしてチェックリストがある。

今回、過去4年間の透析室で使用して来たチェックリストを検討して見たところ、発生した事故には、一定の法則性の様なものを見出す事が出来た。？

この法則性より事故を反省しME機器を使用する看護において、医療の安全性維持とその対策について考察したので報告してみたい。

【第三群】

1 脳神経外科外来患者の動向と看護

脳神経外科外来 発表者：阿部 法子
篠、日 極

産婦人科外来 佐々木、堀 水、塚 田
松 岡、清 水

はじめに

脳神経外科外来が、本院に開設されて以来10数年が経過しました。社会の情勢の変化と共に、患者も年々増加する傾向にあります。そこで、私達は、現在迄の脳神経外科外来に於ける、患者の動向を把握し、今後の外来看護に向かつて、どのように生かしてゆくかを目的とし、調査研究をした結果、軽微ながら患者が理解でき、いままでもより、よい看護ができるのではないかと考えられますので、ここに発表いたします。

1 調査方法

昭和51年度から55年度の外来病歴より、各年度毎に患者を年令別・疾患別に分類し、動向を把握しました。又、昭和56年6月1日より11月30日までの、6ヶ月間の新患について、行われた検査を調査してみました。

2 調査結果

図①より、過去5年間における患者の、年令別の受診状況では、15才未満の患者と、66才以上の患者のように、付添を要するようなケースが、全患者の約4割を占めていることがわかりました。又、脳神経外科疾患の特徴でもある、精神症状や神経症状を呈する為に、付添の介助を要するケースは、更に増加しています。昭和55年度は、26才から65才までが若干減少し、又、66才以上は極めて少ない結果が出ておりますが、その他は、ほとんど変化はありません。

図②からわかるように、外傷は各年度毎で最も多く、交通外傷・不慮の事故などで、低年齢層に多くみられました。高年齢者に多くみられる、脳血管障害は1割強で、中でも生命への危険の大きな脳動脈瘤を見逃すことはできません。

図③は、昭和56年6月1日より、同年11月30日迄の6ヶ月間の新患に行った、年令別検査事項の割合です。

3 考察

この調査で、明らかなように、過去5年間で大きく変化しているというものは、見当りませんが、更に調査していくと、交通機関のスピード化や高令化社会に向かつて、外傷患者や脳血管障害患者は、増加してゆく